



本研究科では、正規の履修科目とは別に、文理融合教育の一環として、英語を共通語とし、専門分野だけではなく多角的な視野から考察できる能力を身につけることを目的とする、IDE C アジアセミナーを全コースの学生を対象に開催している。本誌三二〇号に引き続き、最近のテーマとその内容を簡単に紹介する。なお、英文テキストは、研究科事務室で入手できる。

## IDE C アジアセミナー

### アジア太平洋地域における平和研究 (Peace Research in Asia-Pacific Region)

講師：ラルフ・サリー  
(クイーンズランド大学教授、オーストラリア)

司会：小柏葉子  
(国際協力研究科、助教授、世界秩序)

司会：小柏葉子  
(国際協力研究科、助教授、世界秩序)

本セミナーでは、アジア太平洋地域、特にオーストラリア、およびニュージーランドにおける平和研究の現状を平和研究機関、各種団体等に分けて概観している。

まず、オーストラリアの平和研究機関についていうと、シドニー大学、オーストラリア国立大学平和研究センター、メルボルン大学、ニューアイングランド大学、西オーストラリア大学があげられる。一方、ニュージーランドでは、オークラム大学、オタゴ大学、カンタベリー大学があげられる。これら諸機関は、いずれも広範囲にわたって平和研究を行っている。

次に、各種団体について見てみると、オーストラリアの軍縮党をあげることができる。同党は現在、議席は失つているものの、軍縮を掲げた政党としてユニークな存在である。また、非暴力研究者フォーラム、オーストラリア平和学会も、オーストラリアの平和研究に関わる団体として看過できない。平和運動、非暴力運動に加わっている各個人の動向も、オーストラリアの平和研究を担う重要なアクターということができるよう。

本セミナーでは、オーストラリアの軍縮党をあげることができる。同党は現在、議席は失つているものの、軍縮を掲げた政党としてユニークな存在である。また、非暴力研究者フォーラム、オーストラリア平和学会も、オーストラリアの平和研究に関わる団体として看過できない。平和運動、非暴力運動に加わっている各個人の動向も、オーストラリアの平和研究を担う重要なアクターということができるよう。

大気汚染や水質汚染は、フィリピンにおいても人々の心配するところとなっている。特にフィリピンにおいては、アメリカのEPA(環境保護庁)基準がそのまま環境基準として採用されたりしているが、それを守らせるシステムが欠如しているため、環境の質は年々悪化している。

本セミナーにおいては、日本の援助関連プロジェクトであるバタンガス石炭火力発電所、通称カラカ一号機発電所による大気汚染、土壤汚染について触れられた。

このプロジェクトは、JICA(国際協力事業団)による開発調査が行われたカラバルソン地域開発計画の一環であるとともに、OPEC(海外経済協力基金)による円借款が供与されたものである。折りからの電力不足や環境アセスメントの欠如といったさまざま

一九九六年七月に、クイーンズラン大学で開催される第十六回国際平和学会は、こうしたオーストラリアをはじめとするアジア太平洋地域の平和研究の進展に一層のはずみをつけるものといえるであろう。

(小柏葉子)

### フィリピンの環境問題 (Environmental Problems in Philippines)

講師：アロイシウス・バエズ  
(元フィリピン大学教授、広島大学中央廃液処理施設客員研究員)

司会：松岡俊一  
(国際協力研究科、助教授、開発計画)

### ハイチの環境問題 (Environmental Problems in Haiti)

講師：アロイシウス・バエズ  
(元フィリピン大学教授、広島大学中央廃液処理施設客員研究員)

司会：松岡俊一  
(国際協力研究科、助教授、開発計画)

### 海外における日本女性と西欧女性 (Japanese and Western Women Abroad)

講師：ビバリー・リー  
(広島大学総合科学部、客員研究員、カナダ)

司会：中達啓示  
(国際協力研究科、助教授、国際関係論)

外国において異邦人であるということはどのようなものなのであろうか、という関心に基づいて、母国を離れて暮らしている日本人女性と西洋人女性に対するインタビュー調査を行った。調査の目的は、西洋に住む日本人女性と日本に住む西洋人女性の、それぞれの経験に見い出せる共通点を探ることにある。

一回目の調査では、主としてカナダのバンクーバーにおいて日本人主婦を対象にして行った。二回目は、西洋諸国に住む独身の日本人女性に対して聞き取りを実施した。彼女らの特長は主婦層と違い、必ずしも帰国することを望んでいないことであった。西洋女性に対するインタビューは一九八一年から八二年にかけては群馬で、八三年には横浜で行った。

日本人と西洋人の主婦層に共通してみられた関心事は、外国滞在中の子供

の教育問題であり、帰国後の適応に対する心配であった。両者の大きな違いは、日本人主婦の方が語学面の準備がより良く行われていたということであつた。西洋においては自らを主張することが重要であり、そうした訓練が必要だと日本人主婦たちの多くは感じていたからだ。

(中達啓示)

## アウトサイダーから見た日本の将来

(Japan's Future Development)

講師：アビチャイ・パンターセン

(国際協力研究科、外国人(タイ))

司会：松岡俊一  
(国際協力研究科、助教授、開発計画)

司会：中越信和  
(国際協力研究科、助教授、開発計画)

な要因があるのではなかろうか、といつた指摘がなされた。

いずれにしろ、アウトサイダーの目から見ても、日本経済は奇妙な資本主義として印象づけられたようである。

(松岡俊一)

## 熱帯における林業

(Forestry in the Tropics)

講師：カルロス・ソリアノ

(国立農業大学助教授、ペルー)

マーシ・ギチヨラ  
(国立森林研究所)

バネソム・セブソンバット  
(ラオス農林省森林局)

司会：中越信和  
(国際協力研究科、助教授、生物資源開発)

司会：中越信和  
(国際協力研究科、助教授、生物学)

## 北海道の自然保護

(Nature Conservation in Hokkaido)

講師：佐藤謙

(北海学園大学教授、北海道自然保護協会副会長)

司会：根平邦人  
(国際協力研究科、教授、生物資源開発)

司会：佐藤謙  
(北海学園大学教授、北海道自然保護協会副会長)

司会：根平邦人  
(国際協力研究科、教授、生物資源開発)

## バングラデシュ農村における環境と持続性に関する諸問題

(Environment and Sustainability Issues in Rural Bangladesh)

講師：ズルフィカル・ラーマン

司会：マハラジャン・ケシャブ・ラル  
(広島大学大学院生物圏科学研究科、国費留学生)

司会：マハラジャン・ケシャブ・ラル  
(国際協力研究科、助教授、文化動態)

集落の周辺に木材生産を目的としない環境林を創出しようとするプロジェクトが進行していることが報告された。また、生活に余裕があり雨量に恵まれた地域では、乾燥熱帯林が少しづつ再生しているとのことであった。

統いて、メコン川の流域にあるラオスでは、大河とその支流での洪水を制御するためには、森林の保全が不可欠であり、支流域毎に森林伐採・育成計画を立て、政府がこれを厳しく指導している。しかし、最近多発する突発的な洪水や上流の中国からの水量の変動が大きくなってきて、治水が難しくなっているとの報告があつた。

(根平邦人)

ネル)が、希少な生態系を破壊する恐れがあることが指摘された。

北海道がもはや自然豊かな島ではない、将来も暗いというような内容の講演であった。本セミナーは日本語で行われたが、中越助教授の通訳も手伝つて留学生を含めて活発な議論がなされた。

(根平邦人)

アピチャイ氏は、タイのタマサート大学経済学部准教授であり、一九九四年十月より一年間、広島大学に文部省外国人研究員として滞在され、本セミナーはそのお別れ講義として行われた。タイ人研究者として、バブル崩壊後の日本経済をどのように理解したらよいのか、という問題意識で話は始められた。アピチャイ氏は、戦後の経済成長過程を再整理することにより、今日の日本経済をどのように理解したらよいのか、という問題意識で話を始められた。アピチャイ氏は、戦後の経済成長過程を再整理することにより、今日の日本経済の停滞状況(スタグネーション)を説明しようとした。結論としてまず、アマゾンの熱帯雨林域の西部はペルー領であることはあまり知られていない。この広大な天然林も、山地方面から降りてきた人々によって伐採がなされており、今のところ適正な伐採計画が立てられないことや、種数の多さや生態の違いから伐採後の植栽樹種の選択、育成が確立していないことが報告された。

討論においては、現在の日本の経済状況をスタグネーションという概念で把握できるのかどうか、もつと構造的

北海道における自然保護は、①開発を前提にした北海道開発庁、②国有林率の高さ、③自・社伯仲の政治状況、④第一次産業への高い依存度、などにより強く支配され、「内地の人」が思っているほど単純なものではない。多くの問題が山積みとなっている。

さらに最近の問題として、東ヌアカ洪水と乾期の干ばつ、高い人口増加率、低教育水準、インフラの未整備、政治不安などの社会状況や、宗教・文化的

バングラデシュは、日本の約三分の一の面積であるが、その人口はほぼ日本と同じ一億人以上であり、全世界で九番目に人口密度が高く、その数は一平方キロあたり千人で、人口増加率も二%以上と非常に高い国である。

一人当たりのGDP(国内総生産)は低く、世界で五つの最貧国の中に入れる。大半の人は農村に住んでいますが、約一千万人が土地なし労働者である。多くの人が、生活のために第一次産業に従事しているが、農業生産環境、自然環境すなわち不安定な気候(雨季の



マティ・カタ・ダルニ日雇農業労働者グループ

制、自然環境を配慮した長期計画に基づいた生産・流通システムの改善、政府・非政府レベルでの農村開発における政策調整、開発と環境の両立を重視した教育の強化を主に挙げている。

(マハラジャン)

## アジアにおける海事産業の現状

(Recent Situation of Asian Maritime Industries)

講師..郭承鉉

(漢學工業専門大学副教授、韓国)

楊益生

(大連海事大学助教授、中国)

郭正邦

(天津大学助教授、中国)

ムルディアント

(スラバヤ工科大学上級講師、インドネシア)

テトラス・アドリアント

(スラバヤ工科大学上級講師、インドネシア)

司会..斎藤公男

(国際協力研究科、教授、開発

技術)

背景は、非常に厳しい状況にある。ゆえに、農業生産の増大・開発においては自然・生態系によるストレス、社会・政治によるストレス、経済によるストレスが非常に大きい。

本来ならば、次世代のニーズを満たす能力を失うことなく、今世代のニーズを満たすような持続可能な開発を達成する必要があり、環境保護は開発過程と不可分でなければならない。

今日のバングラデシュでは次世代のことはさておき、今世代のニーズを満足できる水準でまかなうことができない状況にある。他の最貧国においても同様のことが見られるが、開発と環境の両立、すなわち持続可能な開発を考える上では非常に深刻な問題である。

この状況から脱皮するためにラーマン氏は、家族計画を中心とした人口抑

韓国においては、最近の建造ドックの新設など、設備投資が政府のテコ入れもとに増強され、造船受注量も増えたが、一九八七年以来労働者の賃金が上昇し、その受注環境は必ずしも良いとは言えず、我国との協調の必要性を力説した。

次に、東京の海運会社で研修中の大連海事大学楊益生教授は、世界の人口の約二一%を有する中国では、経済開放政策後の膨大な貨物輸送量の増加に対応して、自国商船の船腹増大が、今後益々求められている海運界の現状を紹介した。

続いて広島の造船所で研修中の天津大学の郭正邦助教授は、中国の造船業に向け、今後増大が予想される船腹需要に応えるだけでも大きな市場を有しているが、旧式設備や管理面に問題のあることを述べ、我国の技術支援や人材育成面での協力に対する期待の大きさを述べた。

インドネシアの現状と問題点について、スラバヤ工科大学上級講師のムルディアント、テトラス・アドリアント両氏からの報告があつたが、本誌三二〇号に類似のものが紹介されているので、紙面の都合上ここでは割愛する。

(斎藤公男)

アジア諸国における近年の経済・貿易の発展は、その国の海運の増大を促進し、船腹量も年々増加している。また韓国では、造船設備能力の大幅な増加により、世界の造船受注量のシェアーを伸ばしている。そこで、本セミナーでは、韓国、中国並びにインドネシアにおける海事産業の現状と問題点を討論した。

まず韓国については、本学工学部に日本学術振興会外国人特別研究員として滞在中の郭承鉉副教授にお願いした。

司会..中達啓示

(国際協力研究科、助教授、国際関係論)

国際経済のボーダーレス化が叫ばれていても、実際には領土問題は無くなっていない。実のところ、今日の国境の問題を巡ってブルネイ、中国、マレーシア、フィリピン、台湾、ベトナムが領有権を主張している。しかし、中国は歴史を通して一貫して南沙諸島を領有してきたとはいえない。東南アジア諸国の中でも、英仏といつた旧宗主国の統治実績にのみ依拠している。

南沙問題が深刻になってきたのは、一九七〇年代の石油危機以来のことである。当地の石油資源の存在が明らかになつたためであつた。さらに、二百海里の排他的經濟水域を認める、国連における海洋法審議が対立に拍車を掛けた。南沙諸島の戦略的価値や、近年の周辺諸国の軍拡も問題解決を困難にしている。

国際司法裁判所等での法的解決が難しい以上、対立は政治・経済的手段によつて処理・管理されなければならぬ。軍事的透明性を高めるための、関係諸国による対話は明らかに重要であるし、資源の共同開発等によって問題を経済化することが重要といえよう。

(中達啓示)

南沙諸島をめぐる各國の主張の衝突

(Conflicting Claims in the Spratly Islands)

講師..ランジット・シン(マラヤ大学

社会・人文学部副学部長、マレーシア)

司会..中達啓示

(国際協力研究科、助教授、国際関係論)



# 『微小外科』

—改訂第2版—

編著者 生田 義和



文・生田 義和  
(医学部 教授)

まず最初に、この本の題名の「微小外科」について説明します。この種類の外科は、中国では「顕微外科」、英語では「Microsurgery」と呼ばれている。この言葉から推測できるように、顕微鏡を使った手術という意味である。すなわち、直径が一ミリ前後の血管や神経を顕微鏡を見ながら、長さ三ミリ程度の針の付いた、髪の毛の三分の一程度の太さのナイロン糸を使って縫う手術である。

手術に顕微鏡を使用したのは、Holmgren(一九二二)という耳鼻科医が最初であるが、しかし、顕微鏡を使用することが極めて重要な意味をもつたのは、細い血管を縫合する手術においてであり、最初にこのことを報告したのは、外科医のJacobson(一九六〇)であった。

一九七〇年代に入つてこの手術は急速に発展し、切断された指が再び接着されることが可能になってきたのも、その応用のひとつである。その後、八〇年代に入ると、皮膚・筋肉組織を移植することができるようになった。

今回ご紹介する「微小外科」は、改訂第二版で一九九三年に発行されたものであるが、実は初版は一九七七年十月二十日に私の単著として発行された。すなわち、今から十八年前である。

目次	
第1編 微小外科総論	第1章 第2章
第2編 微小外科序論	第3章 第4章
第5章 微小外科の基礎的技術	第5章 微小血管縫合の歴史的展望
第6章 切断肢指再接着	第6章 視力補助用器具
第7章 皮弁移植	第7章 縫合材料と手術器具
第8章 遊離筋肉移植	第8章 足趾・手移植
第9章 骨・関節の移植	第9章 足・手の移植
第10章 複合組織移植	第10章 骨・関節の移植

『微小外科』について説明します。この種類の外科は、中国では「顕微外科」、英語では「Microsurgery」と呼ばれている。この言葉から推測できるように、顕微鏡を使った手術という意味である。すなわち、直径が一ミリ前後の血管や神経を顕微鏡を見ながら、長さ三ミリ程度の針の付いた、髪の毛の三分の一程度の太さのナイロン糸を使って縫う手術である。

手術を行なう人は世界でも極めて少なく、僅かにメルボルンのO'Brien、サンフランシスコのBuncke、それに奈良の玉井進先生と私など数人程度であった。たまたま私は、恩師津下健哉先生の示唆でこの仕事を始めたが、これに関する学位論文を発表した一九六八年の翌年、ドイツに留学したため、臨床への応用は帰国後の一九七一年以後になってしまった。

その後の数年間は、切断された指の再接着をはじめいろいろな種類の組織移植を行う機会に恵まれ、是非一冊の本にまとめてみたいという気持ちが起り、初版を発行するに至つたのである。

この間、広島大学整形外科へもり、そのうちのお二人の方、当時山口大学整形外科に勤務しておられた土井一輝先生と金沢大学整形外科に勤務されていた吉村先生が、國內・外から何人かの留学生があり、この分野で目覚ましい活躍は急速に発展し、切断された指が再び接着されることが可能になってきたのも、その応用のひとつである。その後、八〇年代に入ると、皮膚・筋肉組織を移植することができるようになった。

いざれにしても、この『微小外科』の手術の分野には、極めて多くの手術方法が開発され、専門分野ができたので、改訂版を出版するにあたり、仲間の二人と一緒に執筆したわけである。また、広島大学整形外科の中でこの方面での仕事を精力的に行なってきた宮本義洋、浜田宣和、福原千史諸兄の仕事も、この著書の中に含めることができた。

内容は、別表に示すとおりであり、現在、整形外科領域で行われている手術のほとんど全てを網羅

されている。また、いろいろな種類の手術を実際の症例を記載することによって、その手術の順序やコツを詳しく述べている。そして、できる限り多く取り入れたこれら症例は、ただ単に上手くいったピックスのひとつは、組に所属している時のイザコザで無くなつた小指の先に、足の指を移植してもらうことによって、ヤクザの世界から足を洗う（身も心も洗う）ことができるようになつたことであ

り、社会的に大きな関心を呼んでいる。著者の一人吉村光生先生は、既に数十人にこのような手術を行つていている。

また、最近ではこの分野の手術は日進月歩、毎年新しい術式が発表され、臨床応用の種類にも整形外科、形成外科の領域は言うに及ばず、多くの領域で目を見張るものがある。

いざれにしても、この『微小外科』の手術の分野には、極めて多くの手術方法が開発され、専門分野ができたので、改訂版を出版するにあたり、仲間の二人と一緒に執筆したわけである。また、広島大学整形外科の中でのこの方面での仕事を精力的に行なってきた宮本義洋、浜田宣和、福原千史諸兄の仕事も、この著書の中に含めることができた。

内容は、別表に示すとおりであり、現在、整形外科領域で行われている手術のほとんど全てを網羅

## プロフィール

（いくた・よしかず）

（昭和四十年生）

（A4判三九五頁）

（昭和四十年生）

（医学研究科修了（医学博士））

（専門 手の外科・マイクロサージャリー・組織移植）

（専門 手の外科・マイクロサ



科学教室